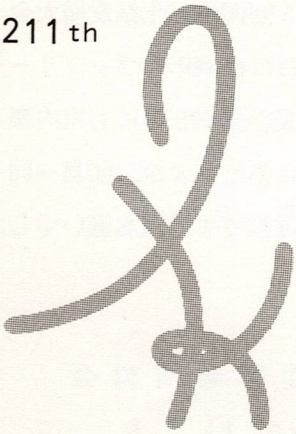
1990.6.9

市川市芸術祭

ICHIKYO 市響

211th

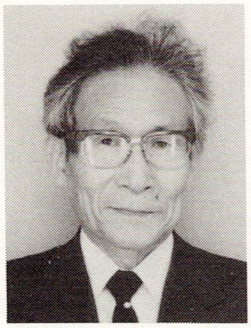


1990年6月9日(土) PM 7:00

市川市文化会館大ホール

主催・市川市教育委員会　市川交響楽団協会

協賛　東洋信託文化財団



開催あいさつ

本日はようこそ第211回市響コンサートにお出で下さいまして、誠に有難とうございました。

当協会は、皆様のご支持により丸39年の歩みを続け、5団体の楽団を擁するまでに発展し、年間30行事に及ぶ活動が出来ますことは、関係者一同深く感謝致しておるところでございます。

今回は、東洋信託文化財団の協賛を得て、市川市教育委員会のご好意もあって市川市芸術祭参加行事として「交響楽の夕べ」を開催する事になりました。指揮は市吹を4年連続全国金賞に導いた市響出身の津田雄二郎氏で、独奏者は矢張芸大出身の市響トレーナー青木直之氏がウェーバーのファゴット協奏曲を致します。二人とも優秀な方々ですので楽しんで戴けると存じます。

市響シニアオーケストラの今年度予定は、6月17日に県民の日記念コンサートに、7月28、29日の大阪である全国アマチュアオーケストラ・フェスティバルに30名程が参加し、10月10日には県内合同大編成の演奏会がマーラーの大作第5交響曲等を当館で致します。又、同月27日には、第5回国民文化祭愛媛大会オーケストラ祭にも数人参加し、12月23日には例年のファミリー交響楽コンサートを当館で実施します。又、来年3月にも室内楽コンサートを計画しております。この様に多忙ですが、団員一同一生懸命に努めますので、終りまでご静聴賜ります様お願い申しあげ、主催者あいさつと致します。

市川交響楽団協会

理事長　村　上　正　治

プ　ロ　グ　ラ　ム

管　弦　楽

喜歌劇「こうもり」序曲　作品362 …… ヨハン・シュトラウス
(1825～1899)

協　奏　曲

ファゴット協奏曲　ヘ長調　作品75…… C.M.ウェーバー
(1786～1826)

―――― 休　　憩 ――――

交　響　楽

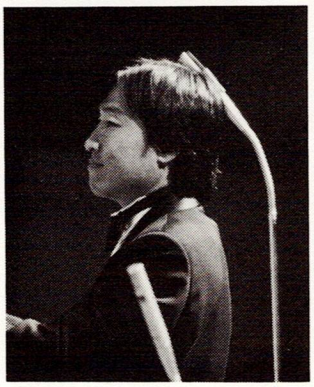
交響曲　第8番　ヘ長調　作品93…… L.W.ベートーベン
(1770～1827)

指　　揮：津　田　雄二郎

ファゴット独奏：青　木　直　之

管　弦　楽：市川交響楽団

紹　　介



津　田　雄二郎＜指　　揮＞

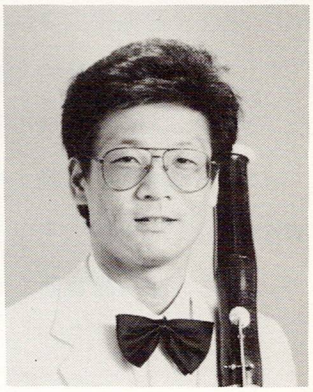
・津田さんの事・

津田さんには、２年前から指揮をしていただいていますが、とてもやさしい人柄で、団員にはたいへん好かれています。本番近くになってもまだできないところがあると、きっと雷でも落としたくなったり、いやみの一つも言いたくなるのでしょうけど、決して怒らず、なんとかしてうまくいくよう励ましてくれます。今回も「こうもり序曲」はテンポが速く、弦楽器がなかなかそろわないので、「困ったなあ。本番までにはできるようになるかなあ。」なんてひとりごとを言っていましたが、５月の最後の練習日に「お互いが幸せになるようにしましょう。」とおっしゃいました。「テンポを速くして指揮者は満足しても、演奏者が四苦八苦して弾くのはお互いの幸せではない。本番までできなかったら少しゆっくりやりましょう。」というのです。こんな暖かいことばをかけられると、もっと練習しなくちゃという気持ちになります。津田さんは、本職は高校の先生ですが、学校でもやさしい先生なのだろうなあと思います。

（バイオリン　石本　記）

経　歴　昭和31年青森県に生まれ。県立国府台高校、東京芸術大学器楽学科を卒業。米国カーチス音楽院聴講生として留学。トロンボーンをディー・スチュワート、伊藤清、永浜幸雄、クルト・プッケ、牧野守英、ジョー・アレッシに、指揮法を大友直人、佐藤功太郎、Ｖｎを桑原幹子、対位法を小倉伸作各氏に師事。現在県立船橋東高校勤務。

青　木　直　之＜ファゴット独奏＞



・青木さんの事・

ファゴット吹きには、不思議と共通した所がある。先づ、とても陽気である事。陰気なファゴット奏者には、あまりお目にかかった事がない。実際いたとしても、それは表面的にそう見せているのであって、頭の中は、年中ポカポカ陽気で、タンポポの２～３本は生やしている人が結構多いのだ。第二に、変わり者が多いという事である。青木さんは、これらの特徴をよく撹拌し、蒸留して不純物を取り除き、抽出液をパックした様な人である。管のトレーナーもして頂いているのだが、適度にユーモアも交えた丁寧なアドバイスは、適切でわかり易く、好評である。

私などは、同じ楽器を扱っている関係で、直接指導して頂く事も多く、そのやさしさに満ち溢れた助言に、何度元気づけられた事か。

いつもお忙がしくて、ゆっくりとお話も伺えないのが残念である。今後ともよろしくお願いします。

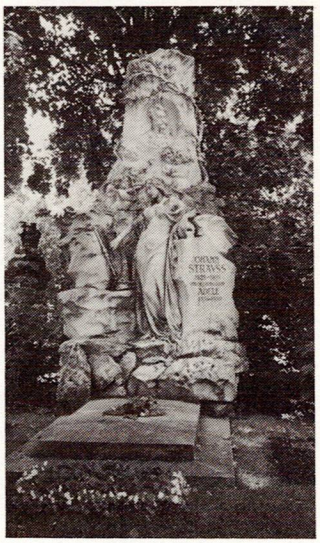
（ファゴット　戸川　記）

経　歴　1961年東京生まれ。14才よりファゴットを始める。昭和59年東京芸術大学音楽学部卒業。ファゴットを故三田平八郎、中川良平、フリッツ・ヘンカー、岡崎耕治、室内楽を中川良平の諸氏に師事。第１回江戸川区新人演奏会入選。現在東邦音楽大学、東邦音楽短期大学、都立南高等学校、聖徳大学附属高等学校講師。又当楽団の管トレーナーを務める。

プログラムによせて

喜歌劇「こうもり」序曲　作品362　　J. シュトラウス

＜ウィーンでの思い出＞



三年前、二週間の休暇を利用して、かねてから行ってみたかった、ウィーンへの旅を実行にうつしました。もちろん、クラシック音楽の中心地であるウィーンの雰囲気をこの肌で感じたかったのと、あのモーツァルトの生誕地であるザルツブルグに行ってみたかったのことからでした。

ウィーンの町は、やはり私が当初想像していた通り町イコール音楽でした。

音楽家とのかかわりのある場所がいたるところにあり、そういう場所を訪ずれて、その当時のことを想像し、実に楽しい毎日を過しました。しかし、自分にとって一番感動的な出来事は、「ウィーン楽友協会ホール」での演奏会でした。プログラムは、すべて、ウィンナーワルツでしかも、ほとんどがヨハンシュトラウスの作品でした。一曲、一曲を実に楽しく演奏をし、まるで、そこにコーヒーでもあれば、喫茶店で気軽に音楽を聞いているという感じでした。又あの「プレイボーイ誌」を指揮者と演奏者が、演奏しながらまわし読みし、聴衆を笑わせたりクラシック音楽が文字通り音楽としていきいきと又自然に生活にとけこんでいるという感銘をうけました。もちろん音楽が、ウィンナーワルツであったこともその一因だったのでしょう。

今日演奏する、喜歌劇「こうもり序曲」が、ワルツ王ヨハンシュトラウスの1874年の作品で、アン・デア・ウィーン劇場で初演され大成功をおさめたなどということは、今日は忘れて、音楽をあのウィーンでのように楽しんでいただければ幸いです。

（バイオリン　山中　記）

ファゴット協奏曲　ヘ長調　作品75　　C. M. ウェーバー

＜ファゴットって？＞

オーケストラで使われる楽器のなかでも、ファゴット（英語でバスーン）についてよく知っている人は少ない。しかし、一度ファゴットの持ち味を知ってしまうと、もう忘れることのできない楽器となってしまうのも事実である。

ファゴットの音色の特性として、低音部の重量感、中音部の柔かな透明感そして高音部の豊かな表情があげられる。この特性は、暗いドラマティックな表現、喜劇性、しっとりとした重み、しなやかな軽さなでの表現にいかんなく発揮され、オーケストラにとって無くては無らない楽器である。

また、「ファゴットは人が鳴らす」とよく言われる。それは、この楽器を駆使してあらゆる効果を出すには、豊かな音楽性と演奏者としての優れた技術が要求されるからである。

さて、ウェーバーのファゴット協奏曲。この曲は、ミュンヘンの宮廷オーケストラのファゴット奏者、ゲオルブ・フリードリッヒ・ブラントの依頼により1811年に作曲された。はずみをもった第1楽章、歌うようになめらかな第2楽章、スタッカートのパッセージによる牧歌風な活気に満ちた最終楽章で構成され、ファゴットの持ち味を十分いかした作品である。ファゴット協奏曲といえば、モーツァルトやビバルディがよく知られているが、ファゴット奏者が愛してやまないウェーバーの

ファゴット協奏曲。青木直之氏による哲学的で華麗な演奏にご期待ください。

（ファゴット　小島　記）

交響曲　第８番　ヘ長調　作品93　　I. W. ベートーヴェン

ベートーヴェンの交響曲の中で最も小規模である第８番は、1812年の春から秋にかけて作曲されている。

この年の夏はボヘミアの避暑地テープリッツで過ごしているが、42才のベートーヴェンはここで文豪ゲーテと知り合うようになり、芸術について人生について深い思索をめぐらすことになる。避暑客の中には、オーストリアの皇帝皇后とその王女達、ザクソニイ王、ザクセ・ワイマール公、フランスの皇后及び多数の皇子達がいた。滞在中の王候達から丁重に待遇されていたゲーテは皇后に対して特別な敬意を表したいと願っていた。そして「重々しい謙譲な言葉で」自分と行動を共にするようにとベートーヴェンに説いた。けれどもベートーヴェンは「何ですって！そんな事をされてはいけませんよ。あの人達が貴方から授かっているものを、あの人達にはっきりと理解させなければなりません。でないとあの人達がそれを見出す時はないでしょう。私は貴方とは全く違った方法をとります。」それから彼は、大公が自分に待っていてくれと言って寄こした事や、そうする代わりに出て来てしまった事などを話した。彼は更に王候には勲章を与えたり宮中顧問官にしたりする事は出来る、だがゲーテのような或いはベートーヴェンのような人間を作ることは出来ない。こうした人物には当然尊敬を払うべきであると言った。そこへ宮中の人達がこちらへやって来た。ベートーヴェンはゲーテに言った。「腕をお組みなさい。きっと私達の為に道を開けるでしょうから」と。だがゲーテは彼から離れて脱帽して路傍に立った。ベートーヴェンは腕を組んで人々の中を通り、ただ帽子に指をかけただけであった。宮中の人々は離れて彼の為に道を開けた。そして我が芸術家に親しい挨拶をした。彼は、道の端れに立って宮中の人達が悉く通過するまで恭しく頭を下げていたゲーテを待っていた。ベートーヴェンはゲーテに「音楽は人間みんなのものです。貴族だけのものじゃありません。音楽家も貴族の召使いじゃありません。ぼくは……ぼくの音楽の前に貴族をひざまずかせてみせます」と。「でっかいこというじゃないか……。ベートーヴェン君は生意気だね。」「でも……やります。きっと。」「では勝手にしたまえ。」（→手塚治虫の未完のマンガ『ルートウッヒ・B』より）と、ゲーテは以後ベートーヴェンとの交際を絶つことになる。

こうした間にも第８交響曲の筆は順調に進み、第７交響曲の完成後のわずか５カ月後の1812年の11月にウィーンで完成した。（初演は1814年２月27日。ウィーン）

曲は４つの楽章からなり古典的な様式をとっているが、響きの斬新さと旋律進行の美しさ、転調の多彩さ（ほとんどロマン主義的）、軽快なリズムの展開など、内容的にはかなり大胆な革新性を有している。演奏の側からみてもやはり一筋縄ではいかない作品の一つで、第１・４楽章などハンマーを連続打ちするようなタフな肉体的エネルギーを必要とする。楽章の特徴であるが、まず第１楽章はたった８小節の動機を発展構築したもので、リズムの弾みがいかにも快い。先にも述べたが転調はまさにロマン的である。第２楽章はメトロノームを発明したメルツェルを讃えた「タッタッタ、愛するメルツェル」というカノン（輪唱）を主題にしたもので、実に気がきいた楽章である。第３楽章は当時の駅馬車で使われたポストホルンが模倣されている。中間部のホルンとクラリネットの二重奏は素朴な楽しい旋律である。第４楽章はいかにもベートーヴェンらしい独特な個性を表出したもので、古典的というよりはむしろロマン的といってよい。

（トランペット　一桝　記）

── 特 別 企 画 ──

“市響の歴史をふりかえる”

市響の特長として“伝統”があげられると思います。そこで今回、長い間市響で活躍されているVnのN氏に関西風インタビューを試みてみました。（実際はN氏は関西弁ではありません。Nさんすみません。）

T「はい!!こんばんわ。今日は市響の歴史をおそわろうと思うてます。よろしゅうお願いします。」

N「何でも聞いてや。」

T「おっちゃんが市響にはいったんいつでっか。」

N「つい最近や。昭和35年や。」（注１）

T「どこが最近や。おっちゃん。わい影も形もあらへん。まだ生まれてへんで。」

N「さよか。練習場所は今と同じ市川小やけど、当時は木造の２階建やで。椅子かて今のような椅子やない。木の長椅子やで。」

T「へェー。ほんま。ほんで初めての演奏会何やったん？」

N「山崎パンの社歌発表会や。村上先生が作曲しはったんや。他に「カルメン」や「コッペリア」もやったんちゃうか。

ほんでからいろんなとこへ演奏旅行行ったなあ。年４回行っとった。今フルート吹いたはる木村はん中学生のとき銚子で、市響の演奏聞いたそうや。」

T「市響は地道な活動をコツコツと続けとったんやなあ。」

N「当時は村上先生が指揮しとったんやけど、その後金子先生が昭和40年から63年まで、その後津田先生にお願いしとるわけや。金子先生のときはマーラーの「巨人」や、ブルックナーの交響曲７番、ベルリオーズの幻想交響曲もやったで。」（注２）

T「最も演奏回数の多い曲は何やろ。」

N「ベントーベンの運命やろ。10回以上やっとるで。」（注３）

T「それベートーベンちゃいます？」

N「すまんすまん。腹へっとんねん。」

T「市響のええとこ何や思わはります？」

N「演奏会が多いからいろんな曲と出会えるとこかなあ。ほんまいろんな曲やったで。」

T「今の市響に何か望むことあります。」

N「演奏旅行へ行きたいなあ。去年は行ったけど、今年はないみたいやからなあ。」

T「今日は勉強になりました。おおきに。」

N「あんたもがんばりや。」

T「よろしゅうお願いします。」

※（注１）創立は昭和26年

（注２）ブルックナー（昭和51年）、マーラー１番（昭和52年）、幻想交響曲（昭和54年）

（注３）第１回の演奏会も「運命」であった。

本日の出演メンバー

コンサートマスター
松山和子

第1バイオリン
亀井玲子
鈴木　薫
轟木朋浩
鳥塚昭子
長尾浩行
永田　匡
広浜浩二
福井康祐
二宮伸雄
柳澤敦子
渡辺千恵子

第2バイオリン
石本恵理
上野洋子
栗林えみ
小島由美子
堤　哲児
根守弘和
深沢武夫
松延裕子
溝田範子
村上葉子
吉岡一郎

ビオラ
小川京子
北見　宏
久保木佳代子
斎藤十一郎
高橋行継
永山聖子
星　乗昭
横田行雄
渡部玲子

チェロ
倉沢由和
瀬川　清
田頭　扶
中村公一
樋口　進
福原耕二
山口勝之

コントラバス
菊地克彦
鈴木重則
鈴木達郎
永井隆士
村上信乃

フルート・ピッコロ
木村純一
木村真諭紀

オーボエ
荒井　淳
森田直輔

クラリネット
市川正幸
時田　雄

ファゴット
小島　厚
戸川安道

ホルン
鹿島典子
河野和正
越塚康央
志賀恒夫

トランペット
一桝泰一
安藤宣明

トロンボーン
久保　昭
鈴木　哲
藪崎裕至

打楽器
岩橋正治
大川勝之

演奏会のお知らせ

市響他千葉県アマチュアオーケストラによる合同演奏

指揮　佐藤功太郎　　お話し　三枝成彰（作曲家）
管弦楽　千葉県フェスティバルオーケストラ

曲目　三枝成彰氏作品より
　　マーラー作曲「交響曲5番」

平成2年10月10日（体育の日）午後2時 開演
市川市文化会館大ホール

主催　千葉交響楽団協会　ほか

※　入場整理券御希望の方は7月上旬から往復ハガキにより受付けます。
宛先　市川市新田2－33－10　市川交響楽団協会事務局 10／10 コンサート係

※　御一緒に演奏してみたい方、弦楽器を中心にメンバーを募集しています。
詳しくは　市響事務局（0473－78－1619）又は
市響インスペクター（時田　03－600－0063）まで

平成二年度市川交響楽団協会活動予定

平成2年	5. 5	第210回市響「市吹30周年、ジュニア響15周年演奏会」	於市川市文化会館
		ストラビンスキー「火の鳥」他　指揮　津田雄二郎	
		ムソルグスキー「展覧会の絵」　指揮　山崎　滋	
	27	県バンド・フェステバル参加	於船橋市民文化ホール
	6. 9	第211回市響「交響楽の夕べ」　指揮　津田雄二郎	於市川市文化会館
		J. シュトラウス　喜歌劇「こうもり」序曲	
		ウエーバー「ファゴット協奏曲」独奏　青木　直之	
		ベートーベン「交響曲第8番」	
	6. 9	クラリネット・アンサンブル	於市川市文化会館
	6. 10	千葉県合唱祭参加	於市川市文化会館
	6. 17	千葉県「県民の日記念コンサート」参加	於千葉県文化会館
	7. 1	子供も大人も歌おう「楽しい音楽会」	於市川市民会館
	7. 28	第18回全国アマチュア・オーケストラ・フェスティバル大阪大会参加	
	29		於ザ・シンフォニーホール
		指揮　秋山　和慶	
		ブラームス「交響曲第4番」	
		ブラームス「バイオリンとチェロの為の二重協奏曲」	
	8. 5	千葉県吹奏楽コンクール参加	於千葉県文化会館
	8. 26	第212回市響「納涼コンサート」	於市川市文化会館
	9. 24	関東吹奏楽コンクール参加	於市川市文化会館
	10. 10	トヨタコミュニティー「オーケストラ演奏会」	於市川市文化会館
		＜みんな音楽の仲間たち＞	
		指　揮　佐藤功太郎	
		お話し　三枝　成彰	
		マーラー「交響曲第5番」ほか	
	10. 14	小・中学生のためのコンサート	於新松戸北中学校
	10. 26	第5回国民文化祭、愛媛「オーケストラ祭」参加	於松山市民会館
	27	同　上	
	28	第213回市響「合唱の集い」	於市川市文化会館
	11. 4	第6回国民文化祭大会旗伝達披露「大音楽会」参加	於幕張メッセ
	11. 11	市川市合唱祭参加	於市川市文化会館
	11. 11	千葉県吹奏楽連盟35周年記念コンサート参加	於千葉県文化会館
	11. 18	小学生のためのコンサート	於菅野小学校
	11. 18	行徳公民館祭参加	於行徳公民館
	12. 23	第214回市響「ファミリー交響楽コンサート」	於市川市文化会館
平成3年	2. 17	市川市小中学校向けクリニック	於市川市文化会館
	2. 24	第215回市響「市川交響吹奏楽団コンサート」	於市川市文化会館
	3. 24	第216回市響「室内楽コンサート」	於市川市文化会館
	3. 28	トヨタ青少年ミュージックキャンプ	於市川市少年自然の家
	29	同　上	於市川市少年自然の家
	30	同　上	於市川市少年自然の家
	31	同　上	於市川市少年自然の家